



▲高月観音の里歴史民俗資料館（高月町渡岸寺）にて



赤後寺 千手観音立像

滝田…私はかつて、大河ドラマで「徳川家康」を演じましたが、この時の役づくりに変な苦労をしました。家康はどんな思いで幕府を開いたのか、長く続いた戦乱の世を終わらせようというエネルギーはどこから湧いてきたのか、わからなかったんです。

このため、私は家康が幼少期を過ごした臨濟寺（静岡市）に数週間こもりました。そこで寺の長老が見せてくれたのが、一枚の小さな涅槃図です。そこには、亡くなられたお釈迦さまを囲み、人間も動物も昆虫も、生きとし生けるものが、そして天界の神々までが涙を流している様子が描かれています。

生きる者には必ず苦しみが伴います。いつ人を殺め、また殺されるかわからない戦国の世においてはなおさらです。命あるものに樂を与え、苦しみを取り除く「慈悲」の心を持った將軍になり、何が何でも戦国の世を終わらせるんだ！というエネルギーを家康に与えたのが臨濟寺の禪師であり、仏教思想だったのでしょう。

これを機に私は家康の人物像を

つかむことができ、役に入り込ん で演技をやり通すことができました。また、これが私の仏教との出会いであり、今日仏像を彫るようになったきっかけの一つです。

慈悲の心と観音文化の里

―今、少し話が出ましたが、滝田さんは近年、仏師として様々な仏像を制作されているとお聞きしました。

滝田…舞台「レ・ミゼラブル」という大作の主演を14年間務めさせていただいたあと、仏教を学びはじめました。小説なり、舞台なり、形はどうであれ、極めたいという気持ちが強かったですね。虚構だけで人生を終わりたいくはない、役者としての自分の幕が下りた後のあり方は？と自身に問うたときに「崇高な仏とともに生きていこう」と思ったのです。

また、亡くなった母の供養のために観音菩薩を彫ってみたが、彫れたんです。観音さまが向こうから来てくださったんですね。「彫る」というよりは「お迎えする」という感じです。

こうして仏像を彫っているなかで起きたのが一昨年の東日本大震災です。家族や友人を失った人たちを目の当たりにして、やむにやまれぬ思いで「地藏願王菩薩像」を彫り始めました。

高さ130cm、130kgの地藏さまで、普通なら完成までに2年かかりますが、念ずれば花開く、というのでしょうか亡くなられた人たちの安らかな眠りと、残された人たちの未来のために、寝食も忘れて彫り続けていたら、4か月で完成したんです。

その地藏さまを安置するお堂も、全国の皆さんからの募金のおかげで2月末には完成します。震災の日から2年となる3月11日には法要を行う予定です。

市長…滝田さんの強い思いはもちろん、全国の皆さんの被災者への思い、そして人知の及ばぬ何かが、地藏さまの完成とお堂の建立を実現させたのかもしれないね。

滝田さんはご存知かと思いますが、長浜にもたくさん観音さまがいらつしやいます。地元の人々の祈りは途絶えることなく、生活の一部となっているのです。

また、戦国時代、焼失の危機に瀕した観音さまを守ったのは村人たちだと伝えられています。ここに生きる人々は心のよりどころである神仏を大切に守り継いできたのです。

滝田さんが彫られた地藏さまも被災された人たちの心のよりどころになるでしょう。

対談会場の紹介

唐喜山赤後寺（高月町唐川）

早朝6時、村の人がおぶくさん（お供えするもの）を持ってお寺を訪れました。毎日お供えするそうです。また、お参りにきた80歳の女性は、「この地に嫁いでも58年間、毎日来ています」と笑顔で元気にお話しくれました。



このお寺は千手観音と聖観音（いずれも重要文化財）を本尊とする高月町唐川にある唐喜山赤後寺。

赤後寺は、無住寺のため、昔から村の人がお供えやお堂の清掃などのお守りをしてきました。

赤後寺の観音さまは、腕や手の多くが失われています。戦国時代、戦火から観音さまを守るため、村人達が川に観音さまを埋め、そのときに失われたと言われています。またご本体が流されないように置いたと伝えられている枕石が今でも残っています。



新年に寄せて

―食と歴史文化、観音信仰に至るまで、大いに語りあっていたきました。ここで新年の抱負をお聞かせください。

滝田…私たちはこれまで物質的に豊かになることばかり求めてきましたが、これから違います。本当に大切なものを取り戻さなくてはなりません。

「生きとし生けるものが共に栄える世界」これが理想ですね。そんな世界をつくる営みの手助けができればと思っています。

市長…滝田さんがおっしゃるように、戦後高度成長をめざして、物の豊かさを追い求めてきましたが、東日本大震災以降、人のつながり、心の豊かさを求める人が多くなってきたと感じます。心豊かな活力ある地域をめざすためにも、今日のお話に出てきた食文化、歴史文化、観音文化など文化の果たす役割が非常に重要だと考えています。

幸い長浜市には、数多くの文化財や風習・生業などの生活文化が根付いています。

こうした「豊かさ」をうまく活かし、文化が薫るまち長浜として、その魅力を内外に発信していきたいです。そして長浜が誇る「市民力」を大いに発揮していただき、さらに活力ある長浜を皆さんとともに築いていきたいと思っています。